2025年3月30日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

マラウイ共和国
千田成美さん(31)
広島市佐伯区出身

文化や習慣を学び適応

私はマラウイの北部に位置するムジンバ県の小学校で6年生に主に算数を教える授業に取り組んだ。

日本の当たり前が通用しないと頭では分かっていたが、言いたいことが通じない、突然始まる4時間もの会議、お葬式のたびに先生たちが一斉に不在となるため授業が中止になるなど、現実は想像以上だった。

マラウイで過ごす毎日にもどかしさを感じ、いらだちを覚えていた。それでも半年ほど経つと、彼らを責めるのではなく、自分が変わるべきだと気付き、彼らを知り、学ぶことから始めることにした。

小学6年生に算数を教える筆者（奥右端）

毎日の授業で彼らの文化や習慣に合わせて歌を取り入れたり、図や絵で説明したりするなどの工夫をし、教員や児童との会話や遊び絵など、彼らの興味を引きそうなことは何でもやった。

すると協力的な児童や教員が徐々に増えてきて、児童の成績も少しずつ向上した。頻繁に起きる停電や水しか出ないシャワー、時間の時間を大事にした。ほかにもフラッシュカードやかけ算カード、10マス計算用紙の導入、週1の小テスト、放課後の補習教室…。日本の折り紙やけん玉、縄跳び、ちぎり通り来ない公共交通機関など、生活面は相変わらずだったが、困った場面では必ず現地の人が助けてくれ、マラウイの温かさに何度も救われた。こうして「マラウイの当たり前」に適応できたような気がする。

帰国後、日本の教育の質の高さ、児童が学校に通い、私が大好きな児童と学べることも、全て当たり前ではないと実感し、感謝する日々である。「世界の全ての人が質の高い教育を受け、自分らしく生きられる世界を当たり前にしたい」との思いはより一層強まった。これからもマラウイのためにできることを考え続け、行動し続けたい。